

国際社会学の試み VI

21世紀初頭における「国際社会学」関連文献の考察

ーグローバル化する世界への問題意識と対応：

国際社会学の体系化へのヒントー*

三橋 利光

キーワード：グローバル化 グローバル社会学 トランスナショナル社会学 トランスナショナル関係論 グローバル・コミュニティ 理論化・体系化
globalization Global Sociology Transnational Sociology Transnational Relations Global Community theorization

序

I 21世紀「国際社会学」関連文献の検討

まとめ

序

筆者による〈国際社会学の試み〉（以下〈試み〉）シリーズは今回で6回目を迎え、いよいよ終盤にさしかかってきた。その第1回目「国際社会学の誕生」（副題）が、はじめて1997年度『論集』に掲載されてから、はや十年が経過した。その間、学問領域上の帰属がややあいまいな「国際社会学」という分野に筆者は新しい時代にふさわしい新鮮味と魅力を感じ、筆者なりのやり方で接近し、従来の社会科学全般を見回してみても見られない可能性をそこに見出そうと努めてきたつもりである。

* 本稿は草稿の段階で複数の査読教員による懇切丁寧な忠言を戴き、頭が下がる思いであった。査読者にたいして心より感謝する。とくにその一人が、驚異的とも言えるほど綿密に草稿を読みこんでくださったことを深く心にとどめている。複数教員から指摘された点で筆者が納得した部分（それがほとんどであるが）については、筆者がおおむね加筆・修正、削除を施した。しかしもともと荒削りの本稿が十分明瞭な論考として仕立て直されているか、恐れている。また第一草稿修正期間中、時間上最大限の配慮を差し伸べてくれた編集委員の教員たちにも感謝したい。

そこで本論に入る前に、これまでの〈試み〉シリーズで何を検討してきたのかを簡単に振り返り、残された問題として今回は、何を問うべきかをまず考えたい。「試み I」では、筆者の構想する国際社会学の位置づけ・枠組み・ねらいとともにその対象とするテーマを 13 項目抽出した。「試み II」では、トランスナショナル運動・現象(その 1)として、世界的な移民政策の歴史を振り返った後、20 世紀末のアムステルダム市の移民にたいする先進的な取り組みを紹介し、さらに日本の移民受け入れ体制について論じた。「試み III」では、トランスナショナル運動・現象(その 2)として、フランスと日本の NGO の活動とその社会的背景を比較した。「試み IV」では、現代の個人と社会の関係をいくつかの図示モデルによって解説した。「試み V」では、20 世紀後半の国際社会学および関連文献を検討することによって、21 世紀の「望ましい地球社会」という概念に盛り込むべき具体的な思想内容を暫定的に抽出した。それは「公正でつつましく豊かな人間味のある世界を目指す」というものである。こうしてこれまでの〈試み〉シリーズの全体をみると、II、III については人びとのトランスナショナル活動や政府・地方自治体によるトランスナショナル事象に関する政策など、具体的内容を検討するものであって、その内容自体は時期によって現実世界で大きく変化していくものである。しかしその他の論考については、I は国際社会学の理論化を図ったもの、IV は一つの理論モデルを提示したもの、V はその理論のなかに価値観・目標を探り当てたもの、といえるだろう。つまりこれまで筆者は〈試み〉シリーズを通して、いわば国際社会学の体系化を、(おぼつかない足取りではあるが、)細々と目指してきたのである。そしてこれまでのすべての「試み」に共通している筆者の意図は、あたらしい、望ましい地球社会の建設への方向性であった。実は筆者は現状分析を踏まえながらも、その建設のための理論化、体系化を目標として暗中模索してきたともいえるのである。

そして、前回の「試み V」において検討した 20 世紀後半までの国際社会学および関連文献においては、筆者の接近できたごく限られた文献から大雑把にまとめると、上記の「あたらしい、望ましい地球社会への建設」への志向は確実にみられることが理解された。しかしながら同時に上記文献におけるその志向は、まだ十分な理論化・体系化に至っていない、ということが判明したのである。

それでは筆者の自的とする、国際社会学の理論化、体系化の試みにおいては、具体的には、筆者自身によって何がすでに提示されていて、何が扱われておらず、あるいは重要な何が十分に論じられてこなかったのだろうか。これらの点に関し、すでに筆者が提示してきたことについては、以下の 3 点を挙げることができる。まず上記で部分的には触れているが、(1)「望ましい地球社会」という目標が設定されたこと。(2)21 世紀の個人のあり方として、個人主義と複数共同体主義の使い分けという生き方が推奨されるという、価値観が示されたこと。さらに(3) 国際社会学を学問上、(比較)社会学と国際関係論の両方のディシプリンにまたが

ることを明確に位置づけたこと（「試み I」134 — 139 頁）、である。またこの最後の点に関しては、「試み IV」で提示した「個人と社会の関係を表わす図示モデル」が、家族・地域社会・国家社会・大地域圏・地球社会へと広がる社会の分析単位の拡大として、捉えることができる（「試み IV」第 1 図複数共同体志向モデル、157 頁）。つまり一方では家族から始まり、国家までを扱うとする社会学と、他方では国家および大地域圏、国際社会を扱う国際関係論の両方の対象領域を視野に収めた。とはいえそこでは、社会学と国際関係論という異なる分野の異なるアプローチをどのように統合するかという問題には触れていなかったのである。この点こそが「国際社会学」において重要な論点にもかかわらず、従来の「国際社会学」文献においても扱われず、また筆者自身も取り上げなかった点である。ましてやそれは議論の対象にもなっていないことを指摘しておきたい。

しかしながら実は、国際社会学が社会学と国際関係論の両方の領域を扱うこと自体が、国際社会学自体の理論化の際に厄介な課題を突きつけるのである。なぜなら（先にも部分的に触れたが、）そもそも社会学とは、家族からはじまる社会について、それが地域社会を経て、国家社会を一つの社会の最大単位とするものであり、社会学全体から俯瞰するならば、その手法はそれぞれの社会と個人との関係をいわば積み上げ方式で分析するように映るであろう。他方で国際関係論は、今でこそ他の要素も考慮されるようにはなったものの、伝統的には（また依然として現在でも）パワーポリティックスやナショナルインタレストを主要な要素として、国際政治、国際社会を分析する学問である。いわば大上段に構えた概念でマクロに捉える傾向を持つ学問といえよう。またスタンスとしても、社会学は理想的であり、（立場の相異はあるとはいえ、）それゆえその内容も理想主義的な傾向を示すかもしれない。他方の国際関係論は、現実政治を扱うために、（これまた研究者の立場にもよるが、）理想主義だけで捉えるわけにはいかず、必ずや現実主義の眼が、分析の際に注がれることは疑いない。そうでなければ空理空論のそしりを免れまい。こうした異なる性格を持つ両学問を統合しようとする、いや統合するまでもなく両者を視野に収めようとする段階からしてすでに、衝突や齟齬が生じるのは不思議ではないのである。しかしながら（上でも指摘したように、）筆者の考えでは、この二つの学問の歩み寄りをいかに可能にするかという点こそが、国際社会学に課せられた最大の課題であろうと考える。なぜならば、国際社会学が「望ましい地球社会」を志向するのであれば、その射程距離は、個人から始まり地球社会大へと対象社会の規模が広がるからである。その際、国家社会を超えた時空は、「国際社会学」が本来扱うべきとされるトランスナショナルな（国境を越える）側面だけでなく、国家・国際組織・超国籍企業などが影響を行使し合う国際関係論の領域に踏み込まざるを得ないからである。ここで筆者の方法論上の立場を吐露すると、筆者の構想する「国際社会学」の研究方法はどちらかというとなら社会学的事であることによって、一定の方向への実のある成果が期待できるように

思われる。なぜなら社会学は 20 世紀の後半、大きな自己変革を遂げ、内省的・反省的な社会学を経て、今では価値観の多様性・平等化が当然のこととして議論しうる成熟度に達していると見られるため、個人から出発する「望ましい地球社会」建設のための理論としてはより有効と考えられるからである。(もちろん国際関係論においても、近年のグローバル化の進展を前にして、以前よりも柔軟な概念が提示されてはいるだろう。)

こうして<試み>シリーズにおける、筆者の構想する「国際社会学」の理論化・体系化の観点からは、社会学と国際関係論という二つの学問領域を橋渡しするような(あるいは両者を統合する)理論の構築が求められていること、そしてそれはこれまでの<試み>シリーズによっては見出すことができなかったことが理解された。

そこで今回の「試み VI」においては、国際社会学を構成する(比較)社会学および国際関係論の近年の成果の中から、両学問を統合するような、理論とまではいかなくても視点や考え方を筆者は是非見つけ出したいと願うのである。またこれまでの<試み>シリーズで、右往左往しながら目指してきた、筆者の構想する国際社会学の志向性が、21 世紀の社会科学のひとつの在り方としておおむね妥当なものといえるのか、あるいはとんでもない勘違いをしているのか、と言う点を確認してみたい。こうして本稿では、国際社会学の理論化・体系化への筆者の試みを補完してくれる可能性—理論上の知見やヴィジョン—を求めて、また筆者の国際社会学の構想の 21 世紀世界における妥当性もしくはその非妥当性を確認するために、21 世紀の国際社会学および関連学問の文献を逍遙して、そのいくつかを検討することにした。つまり、(繰り返すことになるが、)すでに<試み>シリーズにおいて筆者が手探り状態で模索し、目指してきたことは、一言で言えば、上述の「望ましい地球社会」へ向けての**建設のための理論**(あるいはその手がかり)の構築なのである。したがって文献検討においては、筆者の構想する「国際社会学」の路線と同じか異なるのかというスタンスに注目すると同時に、より具体的には次のような点に着目したい。たとえば国際社会学と銘打った文献においては、社会学と国際関係論の両方を射程に入れた総合的な理論化の試みがなされているのか。また社会学プロパーの文献においては、国際関係論と結びつくような広い視野が拓けているのか。さらに国際関係論の文献においては、社会学のアプローチ(すなわち個人と社会を見つめる視点)を考慮に入れているのか、に注意を払おうと思う。またそれぞれの分野において、新たな研究の端緒となるようなパイオニア・ワークがあるか否かも検討したい。この作業によってそれとは別に副次的には、(前論考「試み V」で明らかになったように、20 世紀末までの思想上の模索や提言があったのと同様、)国際社会学や関連の学問の側が、20 世紀末から現在 2007 年までの期間に、この変貌する時期の新しい世界をどのように見て、またそれにたいしていかに対応してきたのかを見定めることができればよい、と願う。

この最後の観点からこの時期の世界を一瞥すると、今でも一定の年配以上の人びとの記憶に生々しく残っていると思われる、ベルリンの壁の崩壊（1989 年）に劇的に象徴されるソ連・東欧ブロックのその後の瓦解による冷戦の終結、さらには今ではたんに「9.11」と言えば誰でもピンと来るニューヨーク同時多発テロ（2001 年）など、歴史を画する大きな事件が生起し、国際社会は大きく揺さぶられたのだった。同時に、この先に何が来るのかは判然とはしないながらも、この世紀の変わり目がそのまま国際政治の分水嶺であるかのように、自らが鮮烈な歴史の転換期に立ち会っているのではないかと気分を高揚させていた人もいたかもしれない。その後の現実の国際政治の大勢は、政治的立場によって見方は異なるだろうが、一つには超大国米国が掲げた国際関係・国際社会の秩序回復の呼びかけに主導され、それに賛同する先進諸国による力学とそれに反対する勢力のせめぎ合いによって動いてきたという側面がみられた。

さらに学問の世界に眼を転じると、こうした大きな変容を経験したこの 20 世紀末から現在の 21 世紀初頭にかけての間に刊行された社会科学の文献に関しては、グローバル化を視野にいれた著作が雨後の筍のように現われ始めたことに気づく。そのことからグローバル化という現象が、近年になって現在の同時代の人びとに、いかに強烈なインパクトと影響力とを与えてきているかをうかがい知れる。さらに国際政治経済の分野では、FTA（自由貿易地域）の締結が急テンポで進展し、とくにアジア地域においては大地域圏の将来的構想がすでに一部では議論されるようになってきた。こうした国際社会の変容を前にして、この時期に刊行された国際社会学関連文献には、変貌する世界や社会に関するあらたな概念や問題意識、視座、さらには意欲的な方法論上の取り組みを示す、知的に鼓舞される興味深い作品が多い。こうした出版現象は、グローバル化とも関連して、急変貌を遂げつつある世界を理解したいという人びとの欲求にたいする、アカデミズムの側からの対応（説明・解釈）ともいえるだろう。

I 21 世紀「国際社会学」関連文献 7 冊の検討

本章で取り上げる文献は、筆者の接近しやすいものを選んだ結果、以下の 7 冊になった。7 篇に限定したのは、筆者の時間的制約を考慮したためである。（以下、前論考「試み V」の続きの番号を付することにする。）

- ⑧ウルリッヒ・ベック著（木前利秋・中村健吾監訳）『グローバル化の社会学—グローバリズムの誤謬—グローバル化への応答』（国文社 2005 年、原書、1997 年）
- ⑨マーティン・オルブロウ著（佐藤康行/内田 健訳）『グローバル時代の社会学』（日本経済評論社 2001 年）

- ⑩・⑪ロビン・コーエン+ポール・ケネディ（山之内 靖[監訳]/伊藤 茂[訳]）『グローバル・ソシオロジーⅠ・Ⅱ』（平凡社、2003年）（原書、Robin Cohen and Paul Kennedy, *Global Sociology*, 2000）
- ⑫吉川 元編『国際関係論を超えて—トランスナショナル関係論の新次元—』（山川出版社 2003年）
- ⑬梶田 孝道[編]『新・国際社会学』（名古屋大学出版会、2005年）
- ⑭入江 昭著（篠原 初枝訳）『グローバル・コミュニティ【国際機関・NGOがつくる世界】』＜アジア太平洋研究選書 4＞（早稲田大学出版部 2006年）

以上7篇の文献の整理の仕方はさまざまに考えられるだろうが、筆者はあえて大きく2つに分類して整理してみたい。第1に、新しい概念を提出するとともに、問題提起をしているもの（⑧・⑨）、第2に、国際社会学上の新しい試みがみられるもの（⑨・⑪・⑫・⑬・⑭）である。以下ではこの整理の仕方によって、検討してみたい。その際にお断りしたいのは、以下の内容検討の際、筆者は上述の問題意識（筆者の構想する「国際社会学」への理論上のヒントがあるか否か）を基準にして論述したいと考えており、個々の著作の全貌を紹介することを必ずしも意図していない点である。そこでは筆者の見解をなるべく客観的に見つけ、煮詰めた上で提示しようとするつもりであるが、それにもかかわらず筆者自身のかなり偏った思い込みを吐露する場合や、あるいは強引な解釈を導き出す結果になってしまう場合があるかもしれない。また選定した文献は、範疇としては国際社会学ないしは社会学、あるいは国際関係論などに入ると思われるが、そのいずれに関しても、各文献で使用されている一つ一つの用語をすべて解説することを顧慮しているわけではないことをあらかじめお断りしておきたい。勝手ながらこうした点をご寛恕いただきたいと思う。

(1) 新しい概念・問題提起

- ⑧ウルリッヒ・ベック著（木前利秋・中村健吾監訳）『グローバル化の社会学—グローバリズムの誤謬—グローバル化への応答』（国文社 2005年、ドイツ語原書版 *Was ist Globalisierung?: Irrtümer des Globalismus: Antworten auf Globalisierung* 1997）

本書は、「グローバル化」を取り込んだ社会学がどのようなものになるのかを論じた書といえよう。まず用語として、「グローバリズム」（経済の新自由主義と同義）・「グローバル化」（国民国家とその主権が弱められる過程）・「グローバリティ」（差異・多様性を認めながら「世界社会」の中で生きているという共通認識を基点とする概念）を区別する。著者は、グローバル化の社会学の登場によって、国民国家にとらわれてきた従来の社会学は打破される、と宣言する。そして、現在の世界の状況とそこでの人びとのあり方を、「世界リスク社

会」(79－87頁)、「世界社会」(104頁)、「場の複数性」(140頁)、「寛容と自己抑制」(156－161頁)、「コスモポリタン民主主義」(182－187頁)、「再帰的近代化・第二の近代化」(242頁・244頁)などの概念と比喩で説明する。また著者は、グローバル時代の自己と他者とのコミュニケーションを重視し、方法論的立場として、結局は著者の言う「コンテクスト普遍主義」に未来を賭けることを重視する。さらに最後の第四部は、「グローバル化への応答」と題されており、そこでは今後の世界の政治的対応として、「グローバリズム」ではなく、あくまでも「グローバリティ」と「グローバル化」に立脚した、1. 国際協力、2. トランスナショナルな国家、もしくは「包容的主権」、3. 資本への参加、4. 教育政策の新たな方向づけ、等、10項目にわたる今後の展望が解説される。しかし実際の印象としては、将来もさることながら現状それ自体をどのように捉えるべきかという観点が強く打ち出されているといえよう。

本書には訳者による詳しい解説が付されている。ベック自身の思想上・理論上の立場や用語を他の社会学者との対比で理解するために役に立つばかりでなく、ベックの主張をどのように受け止めるべきかについての示唆が含まれている。いずれにせよ本書は、現代の世界を社会学的に捉えるために、有益な一冊であると評価できる。ただ内容が豊富で議論が多岐にわたる故であろうか、「グローバル化の社会学」という、ある意味で「特殊な社会学」が何であるのかについて、結局読者には鮮明な像が浮かんでこないかもしれない。ところが筆者の関心からは、本書が国際社会学の方法論上の重要な示唆を含んでいる点が見られるのである。それは次のような点であった。著者ベック氏によると、グローバリティが意味するところは、破壊と創生である。破壊とは国民国家や国民社会という統一が破綻することであり、それに代わって新たに作り出されるのが、「一方における国民国家という単位やそれに縛られたアクターと、他方におけるトランスナショナルなアクター、およびトランスナショナルアイデンティティ、社会空間、状況、プロセスとの間の新たな権力関係、競争関係、紛争、重なり合いである(48頁)」。上記の太字部分の第一、つまり今後起こりうる破壊について、国民国家や国民社会と言う統一が破壊されるという言葉は、個人にとってはアイデンティティの拠りどころを問題にしており、政治指導者にはその拠りどころを強制する政治システムを問題にしている、と考えるのが適当なのだろう。そしてその意味はおそらく、個人にとってはその「アイデンティティの拠りどころ」がすべての人びとにとっておしなべて唯一、国民国家や国民社会ではなくなる(つまり、拠りどころがそれに替わって地域共同体とか、個人のネットワークや仲間関係や恋人関係、あるいは大地域圏、地球社会など、)ことを、そしてまた政治指導者にとっては、国家単位、国民単位のシステムだけではなく、そのほかの共同体システムがあり得るということを、示していると解釈できる。そしてそれは、すでに過去においても現在においても、現実世界では部分的にはすでに進行してきたことである。

実際の問題としては、具体的には、ヨーロッパの EU 圏内の一部ですでに実現しているかに思われる、家族から大地域圏に至るまでのいわば「重層アイデンティティ」の個人内での共存が、「地球市民としてのアイデンティティ」にまで広げることが可能か、という点に向かっていると言うべきだろう。ところが上記の言辞の解釈として、地球上のほとんどすべての地域で、国民国家、国民社会と言う統一性が崩壊すると解釈しうる余地が残っているのかもしれない。筆者としてはそのように解釈するのはやや無理があると感じる。

太字第 2 の部分の指摘については、従来の国際関係論で重視されてきた国民国家を中心とした国際政治上のアクターと、新たに国際社会学が注目して、研究の中心の一つとしてきた NGO などのトランスナショナルな市民運動アクターとが、どのようなパワー関係を切り結ぶかが、研究上の重要なポイントになることを示唆していると解釈できる。そのことは、学問分野として国際社会学と国際関係論とが交差するために、この二つの学問分野は相互補完的に学びあわなければならないことをあらためて教えてくれるし、また双方にとっての将来的な重要課題として、上記が提示されていると考えられるのである。しかしここで筆者の構想する「国際社会学」との関連をふたたび取り上げなければならないと思う。筆者は、もともと「国際社会学」を（比較）社会学と国際関係論を統合してできた二つの領域にまたがる学問と位置づけた（「試み I」）つまり国際社会学の中にも、国際関係論の要素が含まれている一にも関わらず、こうしてあらためて国際関係論と国際社会学とが交差することが重要なポイントになる、と筆者自身が指摘すること自体、国際社会学がいまだ国際関係論を包摂しきれていない、あるいは、国際社会学の社会学的要素（方法論としても対象領域としても）が濃厚であることを、筆者自身が認めているのである。

ともかくも本書は全体としても重要な文献であるには違いないが、筆者にとって本書が問題提起の書と評価するのは、上述のように、(1)個人の複合アイデンティティの示唆、および(2)国際関係論と国際社会学との交差と言う問題の提示、をした点にある。そして(1)については筆者の「国際社会学」の構想の路線を確認するものであった。(2)については、あらためて国際社会学の位置づけを再考せるものであり、筆者としては今後、この点をさらに明確化させる必要がある、と認識したのである。

⑨ マーティン・オルブロウ著（佐藤康行/内田 健訳）『グローバル時代の社会学』（日本経済評論社 2001 年）

本書は、グローバルな条件の下にある現代社会が、社会学にたいして、社会の基礎を再考するようにと求めている（1 頁）という問題意識から出発して、21 世紀の社会学が社会にとってどのように有用な学問であるのかを、また社会学的な考察とはどのようなことを指すのかを、噛み砕いて説明してくれる。その意味で上質でわかりやすい現代社会学入門書（十多

少の応用編を含むもの) といつてよいだろう。過去および現代の社会学者の社会学理論や社会学概念、また著者自身の社会および社会学にたいする考え方やその評価が、平易な文章で明快に解説されてまとめられている。

具体的に得られる新しい知見・知識は読者によつても異なるだろうが、筆者としては、たとえば以下の事項に注目したい。(1) 社会学の 20 世紀における貢献は、世界規模の公共意識を作り出したこと (98 頁)。(2) 20 世紀の半ばまで、ヨーロッパと米国の双方で社会学の分野で幅を利かせたのは、個人と社会という古代ギリシア的な問題だった (103 頁)。(3) 権力概念は、社会科学のあらゆる概念の中で最も重要なものである (112 頁)。(4) グローバル化は、社会構造の理論を構造化理論として再編する推進力として働いた (139 頁)。

また国際社会学にとって刺激的に感じられ、また励まされるのは、上記 (4) とも関連して、a. 「構造化の主要な特性は、複数のコミュニティや地域圏や国家の境界を横断し、同時にこの三者の間を横断することにある」 (140 頁) という指摘である。この文中での「三者の間を横断する」とは、地方自治体・国家・大地域圏を縦横に行き交う、と言うほどの意味だろう。この指摘は今こそまさに国際社会学の出番である、と言っているように解釈できる。さらに著者は、本書の終わりのほうの部分で、b. 社会学には、(未来社会のための) 壮大な物語が重要な意義を持つこと (212 頁)、また c. 社会学はシナリオ作りの学問的な基礎づけに貢献すべきであること (237 頁) を力説している。この 2 つは国際社会学にたいする問題提起と受けとめることができる。

以上 2 篇による、いくつかの問題提起は、筆者の構想する国際社会学にとってはどのような意味を持つのだろうか。それを以下に箇条書きでまとめてみたい。

1. ベック⑧によるアイデンティティの広がりについては、国際関係において今後の大きな問題の一つになると考えられる。この点に関しては、すでに述べたように、「試み IV」の同心円モデルが、それを図示しているといえる。つまり筆者の構想する「国際社会学」(用語を短縮する意味で、僭越ながら以下「三橋国際社会学」と記す) では、ベックの主張を先取りしており、この点において少なくともベックは筆者と同じ路線上であることを確認できた。
2. 同⑧における国際社会学と国際関係論の対峙 (として筆者が解釈した) の問題は、将来、おそらくは避けて通れない課題として筆者は受けとめる。しかし当面の課題である、国際社会学の理論化・体系化との直接的関係はないだろう。
3. オルブロウ⑨は、「社会構造の構造化」という表現によって、これまで動かず、普遍とされていたものが、昨今では流動的になり、とくに、複数コミュニティ・大地域圏・国家の境界を超えてこの三者を横断する傾向が見えると指摘した。「試み IV」の同心円モデルは、個人を取り巻く複数社会を表現したものであり、オルブロウは複数社会間の相

互関係自体が、流動的になっていると言う点で、あたらしい知見を与えてくれたのである。

4. 同⑨は、社会学にとっては、(未来社会のための) 壮大な物語が意義をもつ、とした。まさに「三橋国際社会学」は「望ましい地球社会」を目標としており、その建設への志向を基盤としている、と言う意味で、壮大な物語が語り始まる準備をしたと言えるのだろうか。そうであればつぎには何が待ち受けるのかという物語それ自体を提示すべき、という示唆として受けとめることができる。つまり「三橋国際社会学」と同じ路線である。
5. 同⑨では、社会学は、社会学はシナリオ作りの学問的な基礎づけに貢献すべきであることを主張している。これは4. と同様の意味合いであろう。
6. 総じて、⑧・⑨は、「三橋国際社会学」の路線に同調していることが理解された。問題提起としては、⑨による国際社会学と国際関係論との交差の重要性であろう。その指摘により、(比較) 社会学・国際社会学・国際関係論の位置関係が再度問題であることが明るみにされた。しかしながら社会学にせよ、国際社会学にせよ、それらと国際関係論とを統合する総合理論は、どちらからも提起されていなかったことを確認できるのである。それでは、つぎに国際社会学関連での新しい試みについて、検討してみよう。

(2) 国際社会学・「国際学」上の新しい試み

1. 新しい試み (その1) ⑩・⑪ロビン・コーエン+ポール・ケネディ [著] (山之内 靖 [監訳] / 伊藤 茂 [訳] 『グローバル・ソシオロジーⅠ (格差と亀裂)』『グローバル・ソシオロジー (ダイナミクスと挑戦) Ⅱ』 (平凡社 Ⅰ・Ⅱとも 2003 年、英語原書版 2000 年)

本書は、オールブrouの言う「ひとつの世界を対象とする社会学の目標に、どうすれば到達できるのか」(1987 年) という問題意識を共有する著者が、「グローバル・ソシオロジー」という新たな名称の学問のもとで答えようとする魅力的な試みといえるだろう。その手法は、⑨同様、過去や現在の社会学理論にヒントを求め、また西欧の近代化の課程と帰結を手際よくまとめた(とくに⑩において) 後に、グローバル化によって世界社会が劇的に変化しつつある現実をそのさまざまな側面において読者に明示する(とくに⑪において) という方法を取っている。こうして本書は、世界では3つのレベル(ローカルなもの・ナショナルなもの・グローバルなもの) での相互作用が盛んに進行中であり、そこには発展とともに、亀裂と不平等があることをあらためて教えてくれ、国際社会学の教科書としても適しているだろう。

⑩においては、グローバル化の解釈とグローバル化による変動と不平等な帰結が解説される(第1章グローバル・ソシオロジーへの招待、第2章グローバルに考える、第3章モダニティと世界社会の進化、第4章変貌する労働の世界、第5章ネーションフードと国民国家

[以上第 I 部解釈の基準]、第 6 章グローバルな不平等ージェンダー、人種、階級ー、第 7 章超国籍企業ーその経済的・社会的役割ー、第 8 章不均等発展、第 9 章グローバルな統制の失敗、第 10 章アジア太平洋地域ー奇跡からまぼろしへー [以上第 II 部格差と亀裂])。グローバル化については、著者は 2 人の社会学者の定義を紹介する。オルブロウ (1990 年) によればそれは「世界の諸民族が一つの社会、すなわちグローバル社会に統合されていくプロセス」(⑩ 45 頁) であり、またハーヴェイ (D.Harvey,1989) によれば「時間・空間の圧縮」(⑩ 47 頁) である。しかし、グローバル化がもたらしたとされる、むき出しの個人主義・消費主義への日常的な執着・飽くことのない娯楽の追及などの個人の傾向にたいして、以下の 2 つの異なるグループが強烈に反発しているところが現代的なのであろう。つまり一方では、環境を守り、平和や社会的連帯、責任感、平等を育もうとするいわば進歩派グループ。他方では、多くの国々の家長や宗教・政治指導者たちで、家族や共同体の価値を保持することを望んでいる、いわば伝統的保守派グループである (⑩ 7 頁)。

筆者は⑩によって、グローバル化との関連で国際関係論の一部の理論が現在の社会学によって厳しい理論批判が向けられていることを知った。たとえば、現在では、国際関係論におけるリアリスト的視点にたいして (あまりにも国家中心主義的見方であることに) 疑問が投げかけられていること (⑩ 117 - 118 頁)。またショー [M.Shaw,1994] によれば、国際関係論は社会を形成している複数のアイデンティティを無視していること (⑩ 119 頁)、さらにフェミニズム理論が、女性、社会、国民国家の概念の見直しを迫っていること (⑩ 第 6 章グローバルな不平等) などである。しかし著者の立場は客観的であり、有効な国民国家を求める動きが今でも根強く残る点にも、注意を向けている (⑩ 126 - 127)。

⑩に引き続き⑪では、とくにグローバル化が深化しつつある現代社会の多様な現実の姿を読者にわかりやすく提示することに成功しているといえるだろう (⑪第 11 章人口圧力と移民・第 12 章観光・第 13 章消費文化・第 14 章メディアとコミュニケーション・第 15 章都市生活 [以上第 III 部経験の変容] ・第 16 章社会運動・第 17 章ジェンダー化された世界への挑戦・第 18 章持続可能な未来へー環境運動ー、第 19 章アイデンティティと帰属、第 20 章グローバル社会へユートピアかディストピアかー [以上第 IV 部ダイナミクスと挑戦])。

このうちの第 16 章・17 章・18 章は、世界社会へ変革をもたらしつつある市民運動を取り上げており、第 19 章は、人々の意識、とくにナショナリズムとコスモポリタニズムを問題にする。第 20 章はグローバル化の功罪を論じる。

こうして本書⑩・⑪を総合的に見ると、その最大の特徴は次の 2 点にまとめられるだろう。第 1 に、本書では世界社会の現実が多くの分野で変貌を遂げつつあることが理解できる。その変貌ぶりを社会学理論の紹介とともに、また著者自身の解説とともに提示したこと。第 2 に、方法論上の検討として、従来の国際関係論に対して批判的であり、弱体化する国家機能

という現実を前にするとグローバル社会学によってこそ、ローカル・ナショナル・グローバルという3レベルの諸相を貫く現象や運動が把握できるという主張が見られること。このうち第1については、本書はともに文句なく成功しているといえるだろう。第2については、著者の問題意識自体は先鋭で、納得できるものである。つまりグローバル化社会に関する著者の最大の懸念は、「先進工業国の指導者たち（が）、ソフト面の戦争、すなわち心や精神面の戦争という危険が迫っているという事態を見過ごしている。また先進工業社会に暮らす幸運な人々（とどの国であれエリート）は、今後の生き残りのために地球社会の矛盾や不平等の是正に全力で取り組む必要がある」という点である（⑩8頁）。しかしながらそれを本書の「グローバル・ソシオロジー」によって、理論的に整理した形で統合化されたのかと問うならば、到底そうとは答えられないように思われる。一言で言うならば、本書⑩・⑪は、現在の世界を（その理論や問題をも含めて）魅力的・多彩に紹介しており、読者は世界の変容を社会学的説明とともに多角的に理解することができる。他方において、（おそらくはグローバル化が現在進行中の現象であるという制約を受けているからなのだろうが、筆者の個人的な印象では）それらの変容を統合する社会学としての実質が十分に伴っているとは言いがたく、またそのあるべき方向性も明確には指し示されていない。しかしながら「三橋国際社会学」への理論上のヒントとしては、国際社会学の対象内容として、トランスナショナルな側面とともに、グローバルな側面を取り込む必要があること一つまり、トランスナショナル・グローバル・ソシオロジーとしての「国際社会学」という内容規定が、「国際社会学」の取り扱う内容をより正確に示している一という示唆を与えてくれたといえよう。

2. 新しい試み（その2）⑫吉川 元編『国際関係論を超えて—トランスナショナル関係論の新次元—』（山川出版社 2003年）

本書は、書名が表わすように、従来の国際関係論の分野における新しい発展としての「トランスナショナル関係論」という学問を提示し、その可能性を世に問うた、意欲的な入門書である。とくに序章「国境を超える国際関係論（吉川 元）」では、第1次大戦以降の国際政治の展開と国際関係論の発展とが近年の劇的な変容をも含めて、その背景となる明快な原因説明とともに、手際よくまとめられており、国際関係論の初学者にとって参考になる。この序章を読むだけでも、20世紀以降の国際関係の主要な変貌過程の大筋は把握できるといってもよいだろう。

そこで以下では、まず序章をやや詳しく検討してみたい。

序章の著者吉川氏によると、「トランスナショナル関係論」（脱国家関係論）という学問用語それ自体は、1960～70年代にわたってトランスナショナル関係が急速な進展をみせ、それが国際関係に重要な影響を及ぼすようになったのを受けて提起されたものである。そ

の先駆けとなったのが米国の国際政治学者コヘインとナイによる同名称を含む著書 *Transnational Relations and World Politics* (1971) (『トランスナショナル関係論と世界政治』) であった。また同じ序章の著者によると、「トランスナショナル関係とは、国家と非国家的行為主体との間での、あるいは非国家的行為主体相互での、国境横断的な恒常的相互作用を意味する (6 頁)」。さらにトランスナショナル関係の形成は、国際 NGO のような、トランスナショナル行為主体の存在を前提にする、という (6 頁)。序章ではさらに、それ以降国際関係の分析手法が多様になり、相互依存論、世界社会パラダイム、国際政治経済論、国内政治と国際政治の収斂論 (リンケージ・ポリティックス)、国際レジーム論、国際社会論など、が次々に生まれたことを解説する (11 頁)。さらに近年にいたっては、グローバル・ガバナンス論 (国家・国際機構・NGO を行為主体として、「自然環境や天然資源といった国際公共財の管理と擁護、また貧困撲滅、人権尊重、核の脅威や国際テロリズムからの自由といった人類益の擁護と増進による、地球規模の統治・共生のメカニズムの確立」 [16 - 17 頁] を目指す理論のこと) をはじめとして、民主主義論、「グッド・ガヴァナンス論」、グローバル市民社会論などの成立の背景を述べている (16 - 18 頁)。そして近年において「民主的ガヴァナンスの権利」の方向性 (18 頁) や、アイデンティティのサブナショナル化やグローバル化における安全保障が説明される (19 - 20 頁)。こうして吉川氏は、(反論を覚悟の上で) 国際関係論が、かつての現実主義優勢時代にはハイポリティックスといわれた安全保障、核抑止といった政治・軍事問題が主流の時代から、10 年そこそこで、選挙の監視、選挙支援、民主制度の確立が安全保障問題として取り上げられるようになったばかりでなく、それが地域国際平和、地球安全保障の要諦となったという「国際政治状況変化」に鑑みて、本書は、伝統的国際関係論では捉えきれない、(国際関係・国際社会における) グローバル化の程度、トランスナショナルの程度を明らかにすることをねらいとすると言う (21 - 22 頁)。

序章を総合してみると、トランスナショナル関係論は方法論としては、国際社会学が扱うトランスナショナル運動 (NGO など) を、国際関係のアプローチで行うものであり、その研究対象は近年国際舞台に登場してきた多様な国際関係の諸アクターと諸側面を総合的に研究する学問として捉えることができるように思われる。この理解に立てば、トランスナショナル関係論とは、序章の中の小見出しが告げるように、「トランスナショナル関係という国際関係論」(5 頁)、つまり従来の国際関係論全体が発展・展開した 21 世紀につながる新型国際関係論、もしくは従来からの国際関係論の一部門を占める学問分野、として考えてよいだろう。

本論では、各章において、(また論文本来の意図とは別に、) 筆者にとっては世界の変貌ぶりを改めて再認識することができた点で有意義であったし、また意表をつく問題提起や新し

い視点が提起されている点に興味をもった。たとえば「情報革命とトランスナショナル関係論」(第1章:三上 貴教)においては、著者は国連・G8・WTO・世界銀行が、1999年のWTO反対の「シアトルの人々」(デモ参加者)をなぜその既成システムに内包化できないのか、という疑問を呈している(38頁)。しかし筆者に言わせればその考え方は少なからずナイーブな見解と思われる。なぜならその後の「もう一つのグローバル化運動」の2007年までの進展を見ても、国連にたいしてはともかくも、既成システムとの対決姿勢は顕著であり、また既成システムの側ではこのような運動を一切無視の態度を決め込んでいるように思われるからである。「地球市民と地球市民社会」(第2章:吉田 晴彦)では、日本においては、一方で「地球市民社会」という用語は一般のマスメディア(新聞など)ではあまり使われていないが、インターネット・ホームページでは一転してかなりの程度流通していることが知らされる。他方、「地球市民」という言葉は、一般に広く用いられているという。つまり「市民」は日本人一般には通用しやすく、他方「市民社会」となると日本人一般には通用しにくいと言うことになる。そこで著者はその理由を、西欧人とは違って、日本人の発想法では、「市民社会」の意識が欠如している為であるとする。それは月並みな解釈なのか、あるいは正当な解釈とすべきなのだろうか、筆者には判断しがたい。しかしこれは日本人の「社会」の捉え方に関して非常に興味深い問題を含んでいると筆者は考える。ともかく、日本では人びとが少なくとも「地球市民」としてのアイデンティティを共有しようとし始めているとして、重層的アイデンティティをもつ「地球市民社会」志向のための必要条件を整えつつあるという解釈の可能性を示唆している(67-70頁)。「人権、民主主義、グローバル・ガヴァナンス」(第3章:川村 暁男)では、第2章を発展させる形で、重層的アイデンティティを持つ人びとがNGOを通じて、いかに国連という国際的な制度に働きかけ、人権に関する制度づくりに影響を与え、またその制度が人々の活動を支えたかについて、アムネスティ・インターナショナルを中心に詳しく分析した(90-95頁)。「コモンズの悲劇とエコロジカル・アイデンティティ」(第4章:土佐 弘之)では、ハーディングが示した「コモンズの悲劇」(共有地の悲劇)が別の形態をとって一部の発展途上国に見られるという。その構図とは、個々のアクターが自己利益を追求する結果として、共有地の生態系が破局的になり、再生不可能になるというモデルである。それを途上国森林行政に適用すると、直接・間接に関わる政治家・軍人の利己主義によって国の森林喪失に拍車がかかるという関係で表現される。しかしそれを防ぐ手立てとして、国際環境NGOは、いくつかの失敗を経て、新しいエコロジカル・アイデンティティ概念にたいして、グローバルなアイデンティティとローカルなアイデンティティという両義性をもたせることで、エコロジカルな不正義という問題を解消していることが解説される。こうした新しいアイデンティティの形成が、グローバル化による認識枠組みの変化によるところ大であることを、本論文は教えてくれる。これまで

の第1章から第4章までは、「第I部 国家を超えて」にまとめられているものである。

次の「第II部 国家を割って」では、「第5章エスニシティとエスニック・ネットワーク」(中村 都)、「第6章新しい権力文章の理念と形ー北アイルランド社会の共有を目指してー」(分田 順子)が収められている。また「第III部 国家と共存して」においては、第7章「地球規模問題の解決を目指してー『もう一つのガヴァナンス』とNGO ネットワーク」(上村 雄彦)、第8章「WTOに見る多国間主義と紛争解決」(渡邊 頼純)、第9章「グローバル化と国際安全保障」(吉川 元)と続く。このなかで問題解決のための理論化にとってきわめて大事な、現実に根ざした着想として注目されるのが第7章である。この著者(植村氏)の意図は、(1)「地球」的視点から世界を見ると国家や国連が地球規模問題の解決に果たしてきた役割は何かを考察した後に、(2)NGOの現状と問題点を明らかにして、「もう一つのガヴァナンス(世界統治)」を評価することにあつた。その具体的内容検討は、地球規模問題群を的確に要領よく解説し、その根本原因(先進国の大量消費・大量廃棄と途上国の貧困、世界の紛争問題)の関連性を探り、問題解決の方向性を見定める(グリーン経済の導入と、さまざまなレベルでの環境教育)というものである。植村氏は2002年に実施された世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット)を例にとり、それを検討した結果、政府代表団は国益に縛られ、国連は議論の場や情報を提供するだけ、NGOは力不足、と言う各アクターの欠陥を指摘する。そしてこうした現状に対する解決の方向として、氏はNGOのネットワーキングに期待するのである。とくに a. 内発的發展、b. エコビレッジ(環境調和社会を試みている共同体)、c. 地球市民教育、d. 「もう一つのガヴァナンス」、の4つの領域で個別に活動しているNGO同士が相互に連携することで大きな力になることを主張する。その提案の具体的な中身は、たとえば「地球市民国連」構想の紹介など、興味深い。要するに筆者は、著者の現実に即した問題点の指摘と、解決のための鍵をネットワーキングに探ろうとしたこれまた現実に即した着想の提示を、いわば地球問題群の解決のための出発点として位置づけたいのである。それは同時に「望ましい地球社会」への確実な出発点となるはずだからである。

ところで本書を総合的に判断すると、先にも触れたように、国際関係論の新しいアプローチとしてのトランスナショナル関係論ということができ、トランスナショナルおよびグローバルな現象・運動・関係などを国際関係論の視点から扱う学問分野ということができよう。その意味でトランスナショナル関係論は、国際社会学とは方法論上(あるいはディシプリンとして)、補完関係にあることが理解される。なぜなら国際社会学は、主としてトランスナショナル現象・運動を社会的に分析するものと筆者は考えるからである。つまり本書⑩は、国際社会学とトランスナショナル関係論の位置づけと対象領域に関して、前書⑪出の知見をさらに明確化することに確かに役立ったのだった。こうして「国際社会学」は国際関係論と切り結びながら、とくに国際関係論のなかのトランスナショナル関係論と方法論的には補完

関係を持ちながら、より実りのある学問へと発展することが期待されるのではないだろうか。しかしながら、本書はトランスナショナルのあたらしい理論構築を成し遂げたと言うわけでは決してない。それはそうとしても、総じて本書の内容は、近年の世界社会の人々の認識の変化や、制度への個人や集団による働きかけ、ガバナンス論、グローバル化、国際関係での重要事項など、さまざまな重要な要素と新しい資料・視点に満ち溢れている。その点で国際関係論への貴重な貢献である。本書が扱う問題群は現時点で新鮮なものに映る。版を重ねるごとに現実社会の新しい進展やさらに新しい視座を追加することにより、(編者が望むように) いつまでも重要文献として残ることを祈念したい書である。

3. 新しい試み (その3)

⑬ 梶田 孝道 [編] 『新・国際社会学』 (名古屋大学出版会、2005 年)

本書は、編者である故梶田孝道によると、編者の前書梶田孝道『国際社会学』(名古屋大学出版会、第一版 1992 年、改定第二版 1996 年)の出版から 13 年を経て、その間に「国際社会学」が学問として一定の制度化をみて、また「社会学」の一ジャンルとして定着したことを踏まえて、また 1990 年代のグローバル化の進展など世界の変貌や社会学科学上の新しい概念の開発などを射程に取り込み、現実世界の解説もさることながら、「国際社会学」のとくに理論面での格上げ・洗練化を図ったものである。入門的なテキストであると同時に、より本格的なレベルにした、と編者が胸を張るように (はじめに、i-v 頁)、現時点での「国際社会学」の紹介書としてもっとも充実した内容を擁しており、また得るところが多い書である。「国際社会学」の開拓者が馬場伸也(『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会、1980 年)であり、それを第 1 世代とすると、第 2 世代として「国際社会学」を普及・定着させた代表者(少なくともその有力なひとり)もしくは功労者が故梶田孝道であると評することには異論がないだろう。

本書の魅力は、国際社会学の扱う諸分野における新しい動向がふんだんに紹介されている点にある。

その一部を紹介すると、第 1 章「国際移民の社会学 (小井戸彰宏)」では、近年において送り出し国と受入国との間を持続的に移動し、還流するという「トランスナショナル移民」(transnational migrants)と言う新しいタイプの移民が、社会の底辺層にも増えてきていることを教えてくれる。第 2 章「エスニシティの社会学」(樋口直人)では、「第一の近代」から「第二の近代」への移行とともに、1980 年代後半以降、失業や犯罪がエスニシティとの関連で問題化されるようになったこととの関係で、「エスニシティの個人化」などが説明される。著者はこの問題を、受入国でのエスニック関係原理が「競合から排除」へと必然性をもって構造を変えた現象であると分析する。「おわりに」ではエスニック現象を社会学的に理解し

ようとする著者の真摯な取り組み姿勢が感じられる。第3章「ネーションとナショナリズムの社会学」（吉野耕作）では、ナショナリズム論の整理をしたのち、英国発祥のカルチュラル・スタディーズが世界各地に伝播し、非西欧世界で新たな発展をみたことを説明し、さらにネーション、ナショナリズムの社会学における実証的研究の可能性を探る。こうした社会学による研究と国際関係論で扱われる国家概念、ナショナリズム研究とを付き合わせることで、今後、実りある成果が期待できそうだ。第4章「ジェンダーと国際関係の社会学— マスキュリニティ（男らしさ）の再編—」（土佐弘之）は、（すでに筆者が先の⑩「第六章 グローバルな不平等」について多少触れたテーマであるが [13頁]）、「伝統的な」国際関係論に慣れ親しんできた者には眼が覚めるような論考である。著者によると、国際関係は、もともと国際関係論の知識体系がアングロ・アメリカ的なバイアス性を強く保持しており、そこでフェミニスト的視点からの国際政治学（国際関係論）の脱/再構築化の作業が現在続けられてはいるものの、ジェンダー政治研究を深めるためにはさらに男性学やマスキュリニティ研究（men and masculinity studies）を視野に入れた、国際政治学（国際関係論）の脱/再構築化の作業が必要だと言う。具体的には、国際関係における植民地支配も、マスキュリニティにおける欠陥（その欠如＝女々しさ、ないしはその過剰さ＝野蛮さ）が文明的に達していないことの証の一つとして語られ、植民地支配の正当化論理として利用されていたこと、1990年代以降、人道的軍事介入や平和強制活動などとともに、軍事的マスキュリニズムが台頭しているばかりか、米国を中心とした軍事化と連動したハイパー・マスキュリニティの再形成の動きがあること、などが挙げられる。また「ジェンダー主流化」（Gender Mainstreaming）と言う用語が導入され、国連における平和維持活動に関する一連の宣言や会議が重ねられたことは、それが進んでいるものだ、と説明される。筆者がこの論文に注目するのは、第1に、（国際関係論のリアリズムに対しフェミニズムの立場からの批判はすでに1990年代に向けられていたとはいえ、）このジェンダー概念で、あらためてパワー関係・国際関係を捉えようとすることの新鮮さ故である。（国際関係を社会学的に見る一つの興味深い試み、といえるのではないだろうか。）第2に、このジェンダー概念を国際関係に適用するというやり方は、学問上の分析方法を離れて現実の国際関係の枠内に限っても、西欧世界が国際関係システムの秩序体系を形成する際にしばしば見られるくある種のイデオロギーを金科玉条にして、他に押し付けるやり方>がまた一つ現れたのではないか、とも受けとめられる点である。

第5章「宗教と国家の比較社会学」（加納弘勝）では、宗教と政治との関係を、イスラム社会から抽出した「政治中枢」と「文化中枢」・「文化の相対的自立性」・「構造の非構造化」・「非構造の構造化」などの概念によって、アフリカ社会およびラテンアメリカ社会を宗教の政治への影響力と言う観点から分析しようとする比較社会的な試みである。著者の

問題意識の背後にはイスラーム社会とキリスト教社会とでは、どちらが政治パワーに対峙する際の、社会における自立性およびその影響力が強いか、という問いがあるように思われる(おそらく著者の仮定はイスラーム社会の方がキリスト教社会よりもその両方の面で強いというものだろう)。ところでその説明および分析は、キリスト教徒(45.4%)・イスラーム教徒(41.5%)がほぼ拮抗するアフリカに関しても、圧倒的にキリスト教徒の多い(93.6%)ラテンアメリカに関しても、なかなか示唆に豊み、興味深いものである。ただその一方で、これら双方の地域の分析が上記の抽象概念を適用して導き出されたというよりも、すでにそれぞれの地域に関する既成の研究成果をまとめたものとの印象が強い。しかしながら、上記概念を比較可能な枠組みとして提示したのであれば、そこには可能性を見ることができるともかもしれない。筆者としては、上記概念とその適用方法を洗練化させることにより、著者が終わりで述べるように(108頁)、アジア地域での仏教主義運動についても比較研究が進展することを期待したい。これまでの章は<第Ⅰ部 国際社会学の基礎理論>として括られているのである。

次の<第Ⅱ部 国家を横断する主体と現実>では、全部で以下の5章が扱われる。第6章 EUにおける人の国際移動—移民とイスラームを中心に—(梶田 孝道)、第7章 グローバル化の諸力と都市空間の再編—グローバル都市・東京の「下町」から—(五十嵐 泰正)、第8章 トランスナショナル・メディアの可能性—越境するメディアと東アジアのつながり方—(岩淵 功一)、第9章 国境を越える社会運動(稲葉 奈々子)、第10章 NGOとグローバル市民社会(遠藤 貢)。第6章では、現今のヨーロッパの情勢が手際よくまとめられている。第7章では、ややジャーナリスティックな記述であるのはよいとしても、著者の焦点がどこにあるのかを捉えにくいきらいがある。第8章では、1990年代以降、魅力あるメディア文化の越境はアメリカの独擅場ではなくなり、グローバル文化・アメリカ文化を通過した後、アジア文化の消費の時代が来ていることが述べられている。第9章は、近年の社会学が注目する社会現象とテーマに関する根本的問いかけやアプローチを解説し、南と北の市民運動およびその背景、さらに北の市民運動が、いわば南北問題の「オリエンタリズム」ともいえるべき幻想で行動している側面があることなど、慧眼が光る好論文である。第10章は、国際 NGO に関係する「トランスナショナル市民社会」、「グローバル市民社会」などの概念整理がされ、2つの事例研究(ジュビリー2000と地雷禁止国際キャンペーン(ICBL))とともに基礎的知識が提供される。

最後の<第Ⅲ部 変貌する人種/民族/国家>は全部で次の5章構成である。第11章 アイデンティティ・ポリティクスのジレンマ—アメリカ合衆国の現在—(竹沢 泰子)、第12章 多文化主義政策の現在—多元国家カナダの変貌—(加藤 普章)、第13章 社会主義後の多民族状況—ロシア連邦の行方—(渡邊 日日)、第14章 経済発展とエスニック関係—「脱・発展途上

国」マレーシアの事例—（石井 由香）、第 15 章在日韓国・朝鮮人の変貌—日本社会と在日アイデンティティ 1 の現在（金 泰泳）。

第 11 章では、アイデンティティ・ポリティックスという米国における「長年抑圧されてきたマイノリティが、集団アイデンティティを基盤として社会運動を展開するなど、アイデンティティを動員した新しいタイプの政治」（220 頁）を巡る、近年の状況が詳しく解説されている。昨今、この複数のアイデンティティ・ポリティックスがある意味では臨界に達しているという著者の認識とともに、著者によるそれを超える方途をも示している（同、おわりに、234-35 頁）。第 12 章では、カナダの「多元化」プロセスを 1980 年代以降に辿り、言語・移民・先住民というそこでの変化の 3 要素に関する政策と課題が整理されている。第 13 章では、ソヴィエト連邦解体（1991 年）前後の旧ソヴィエト連邦における民族状況と、解体前・後それぞれの元構成共和国の政策、ならびにエストニア・タタールスタンの事例研究、極東における中国人移民の増加などが解説される。第 14 章では、アジア諸国における中間層の台頭という視点からマレーシアにおける近年のエスニック関係を検討するもので、インターネットを使った中間層を基盤とする新たな言語空間が生まれつつあることを教えてくれる。第 15 章では、在日韓国朝鮮人の世代の中心が、1980 年代から 90 年代にかけて 2 世、3 世へと移行し、よく指摘される「在日アイデンティティの多様化」とともに、2003 年では外国人登録者に占める韓国・朝鮮人の割合が 32 % 台に落ち込んだと言う現実や、現在、3 世において盛んになり始めている語学習得を目的とした「韓国留学」をする者へのインタビューを交え、若い世代における帰属意識の変化、ならびに日本における对在日外国人政策の漸進的变化などを伝える。

本書の全体の編集方針から、各章末にテーマに沿った参考文献が 10 冊前後掲げられており、さらにその主要なものについては簡単な解説が付されているので、より深い研究のための良い指針となるだろう。また巻末には各章ごとにキーワード 4、5 点が丁寧に説明されており、初学者の参考になるはずだ。こうして本書を全体として眺めると、21 世紀初頭の今、世界各地で、国境を越える（トランスナショナル）現象や民族・エスニシティを巡る状況が大きく変化しつつあることを、手っ取り早く、具体的に知ることができる点で有用である。編書というのとはかく全体の統一性にかけるきらいがあるものだが、本書はむしろ、全体としての統一性も見られる点で評価できる。本論考で取り上げた 7 冊の文献のうち、本文献⑬は、文献⑩・⑪と内容構成が共通するものがある。しかし前者も後者もともにグローバル（地球規模）な側面とトランスナショナル（国境を越える）な側面の両方を扱っているにもかかわらず、本⑬は比較的トランスナショナルな面を総合的に扱う傾向があり、文献⑩・⑪は、比較的グローバルな面を総合的に扱う傾向を持つ、という違いがあるだろう。ところで本文献⑬は、アプローチとしては社会学的分析が多いものの、国際関係論と交差する内容を

も含んでいるという点で、前論文⑫と補完関係を持つ例と考えることが出来よう。しかしながら「新・国際社会学」と銘打って世界社会の新しい傾向の紹介とともに、とくに理論面での格上げ・洗練化を図るという編者の意図は実現されているのだろうかという疑問は残るのである。(これは筆者のないものねだりなのかもしれないが、またこれまでの文献にも共通することであるが) その「新しい試み」によっても、国際社会学の学問としての統合的な理論にまでは具体化されていないどころか、そこまで望まなくても、国際社会学の統合的な理論上・方法論上の手続きへの模索がみられない、あるいはその意図も看取できないことが惜しまれるのである。そうなると、国際社会学が「定着した」といっても、その内容は、学問としての内容が今ひとつ見えてこない「国際学」といわれるもの同様に、時代の動きにつれ、短期的にその都度そのときの現状に合わせて見方や分析を改変していくばかりである(確かに、改変して新しい情報を伝えることの重要性を筆者は認めはするが)。またそれぞれのテーマ(分野)ごとの理論は紹介されるものの、それらの理論をさらに統合するような大理論や、そこまで行かなくても統合的な図式や、また方向性すら示されないとすれば、あたらしい学問分野としての体裁が整ったとはまだ言いがたいのである。

それでは最後にもう一つの文献を検討してみよう。

4. 新しい試み(その4)

⑭入江 昭著(篠原 初枝訳)『グローバル・コミュニティ【国際機関・NGOがつくる世界】』<アジア太平洋研究選書 4>(早稲田大学出版部 2006年)

本書は、国際組織に焦点を当てて、歴史家の視点から現代の国際関係の歴史を問い直してみるという興味深い試みである。著者が言うように、従来の国際関係史においては、国家間の関係、とくに政治外交上の問題が主たる関心となっており、その主要テーマは「外交」、「大国の興亡」、「戦争の原因」、「第一次(第二次)世界大戦の起源」などであり、国際組織の役割など微々たるものとして脇役に押しやられていたのである(序章、5頁)。そこで本書の意図は、「グローバル・コミュニティ」という概念によって、これまで国際関係史で端役に追いやられていた国際組織が辿った軌跡を辿り、世界の中でそれが果たす役割を明らかにすることにある。国家間関係史におけるこの「これまでの脇役」に新鮮な力点が置かれているために、(1) 国際関係史を見直すきっかけになると思われ、また(2) 国際社会学にとっても大きな示唆を与えてくれるものである。それぞれについて以下に具体的に述べる。

まず上記(1)に関しては、本書の内容を各章ごとにごく一部を検討したい。1章「グローバル・コミュニティの源流」、2章「新しい国際主義」では、著者はまず国際組織の設立が19世紀の「国際主義」の芽生えとともに実現したが、初期のNGOは国際赤十字の成立事情に見るように、NGOというよりも政府間組織であったことが解説される。また20世紀に入

り第一次世界大戦・第二次世界大戦およびその戦間期に関しては、従来の史観では、戦争への道を準備した期間となるが、入江氏は、それぞれにおいて、国際機関を通して複数の平和への道程もあった、と考えることができる、と指摘する。またウルフ (Leonard Woolf) 著『国際統治 (International Government)』(1916年)を引用して、第一次世界大戦が「国際公益」を認めるようになったことを説明する。さらに戦間期の1920年代・30年代における各国の国内優先主義と国際主義との勢力関係については今後の研究に待たなければならないものの、少なくとも国際主義が連綿と根付いており、国際組織が活発な活動を続け、その数は増加していたことを指摘する。2章において、第二次世界大戦後の国際連合の結成とともに、戦前・戦後の米国のNGOが平和、人権、人道的救済、教育・文化交流に果たした力強い貢献が語られていて印象的である。3章「冷戦を超えて」では、1950年代に関する冷戦を中心とする見方から離れて、「ヨーロッパ経済共同体」の創立(1957年ローマ条約に基づき翌58年に創立)・最初のアジア・アフリカ会議(1955年、バンドン)・パグウォッシュ会議の開催など、地域連合や平和志向がみられること、また近代化理論が、ヨーロッパ中心と批判されたものの、少なくともこの理論は異なる歴史を有する世界各地をひとつの枠組みに概念的に結びつける可能性を示したことを評価している。4章「新独立国家誕生の時代とNGOの増加」は、1960年代を扱っている。通常、この時期はキューバ危機・ベトナム戦争・中ソ対立の権力政治上の出来事を通して描かれるが、この10年間に政府間国際組織が145から280に増加し、NGOは1,628団体から2,795団体に増加した時期として紹介し、米国では平和部隊が派遣され、ヴァチカンからは教皇ヨハネス二十三世によるく地上に平和を>の呼びかけがあり、米ソ間では、教育的・芸術的な交流が行われた時期として説明される。こうして、5章「市民社会の成長」(1970年代)、6章「グローバル・コミュニティへ向けて」(1980年代・1990年代)へと続き、最終的には「グローバル共同体」を、定義の仕方にもよるが、その存在は明白であるとする。また「結論」においては、著者は、NGOの「革命」とも称される目覚ましい発展とともに、その活動に関する説明責任が問われるという課題を指摘することを忘れない。また同時にNGOが主権国家・国際システム・ビジネスの世界などと、相互補完的につながり、関心を共有し、問題を強調して解決していこうとする共同体に発展することに、期待をかけている。

このように本書は、一貫して、20世紀の国際関係において国際機関が連綿として発展し続け、時期によって強弱はあるものの、国際関係の動向に大きな影響力を及ぼしてきたこと、またそれがより強力な国家間関係に屈したことはあったにせよ、21世紀の今、それが国際社会において大きな可能性を秘めていることを明らかにした。つまり国際関係論の領域において、本書は国際組織の役割に焦点を当て、それに関するマクロ的分析によって国際関係史上、パイオニア・ワークとしての意味を持つだろう。

上記(2)の国際社会学上の示唆に関しては、直前の(1)と直接的に関連する。つまり著者の言う「グローバル・コミュニティ」の現代国際関係史上の軌跡は、「三橋国際社会学」の観点からは、それが目標とする「望ましい地球社会」へ向けての国際組織の歩みを大筋でまとめるという貴重な貢献をなしたものと受け止めることができるのである。それはマクロ分析である点が特徴的であり、それゆえにこそ俯瞰図のような流れが明瞭に見えてきたのである。

ところで訳者による解説によれば、著者が前著『権力政治を越えて』と同様に「国家を相対化させた視点から歴史を捉えようとする態度」(248頁)とともに、「人々の意識、思想の重要性を強調している」点(同248頁)が著者のこれまでの研究とも共通していると言う。筆者にはその両方が貴重なことだと考える。

まとめ

これまでの検討から、「三橋国際社会学」の理論化・体系化との関連で理解されたこと、あるいは確認できたことは、以下のように整理することができるだろう。「三橋国際社会学」は「望ましい地球社会」という目標を掲げて、それに至る方法を、個人に焦点に当て(限定し)、それを取り巻く社会を、地域共同体・国家社会・大地域圏・地球社会へと拡大する複数社会への個人の帰属と愛着を醸成すること、またそれぞれの社会への貢献をすること(実践)に求めた。それはいわば地域共同体志向である。しかし同時に、個人主義志向をネットワークで結びつけ、個人主義ネットワーク・モデルにより、個人の自由で闊達、世界に羽ばたく自己充実と自己実現の世界でも生きることを奨励した。この二つの志向の統合が、21世紀社会に求められる個人の生き方に関する一つのあるべき姿とした。その上で、国際社会学の学問上の位置づけに関しては、それが(比較)社会学と国際関係論を統合した学問としてかつては位置付けたものの、いまだに、(比較)社会学・国際関係論・国際社会学の相互間の関係が、曖昧であり、その間の整合性を図ることが必要であることが理解された。またそのこととも関連するが、「望ましい地球社会」へ至る過程において、国際関係論と国際社会学との対峙が必然となることが理解された。さらに理論面では十分とは言えないものの、地球規模問題群に対処するためのさまざまな処方箋がすでに提出されていることが確認できた(その一つとして本稿で扱った文献⑩第7章がある)。こうして本稿では、「望ましい地球社会」を目指す、総合理論は、21世紀の現在でも提出されていないこと、それにも関わらず、それへ至る方途はさまざまに試みられていることが明らかになったのである。すでに学問レベルでは、「望ましい地球社会」へ向かって、さまざまな試みが行なわれている。「グローバル・ガバナンス論」、「社会開発論」はそのような方向での学問領域であろう。それらと国際

社会学がどのような関係性を明らかにすることも今後の課題である。

こうして「三橋国際社会学」の理論化・体系化で残されていることは、国際社会学および国際関係論を統合するような理論体系を自分で構築すること、ということになるのだろう。それは困難ではあるが、挑戦するに値するものだ。それができれば、「国際社会学」を 21 世紀の国際社会学として整理し直すことにつながるだろう。またそれは社会科学の新しい展望を切り拓くことにつながるのではないかと期待するのである。

Reactions and Responses from
“Transnational Sociology” and the Related Social Sciences
vis- à- vis the Changing Globalizing World at the Beginning
of the 21st Century

<Series: Essays on Transnational Sociology, VI>

MITSUHASHI Toshimitsu

Abstract

One of the author’s major concerns in Trans-national Sociology has been how to build it up as an integrating discipline in social sciences, equipped with values, goals, theory, and methodology, bridging the academic society and the real world, for the purpose of uniting our human efforts to make this world more agreeable and more desirable to live in for all folks on earth in the proximate future. In the previous article published about a year ago, the author extracted some provisional common global goals from seven important books in the late 20th century literature on Social Sciences: his temporary conclusion is that we, people of every corner of the planet should strive to achieve an equitable world in all fields where people can live with simple, modest, and humane hearts.

Now the author confronts another problem. After seeing the September 11th terrorist attacks in the opening of the 21st Century and in face of the ever rapidly changing globalizing world thereafter, he has an urge to grasp quickly how some of the social scientists of nowadays, especially in the fields of sociology as well as in international relations, have reacted to and explained this present world of transformation. The author’s aim is not so much in interpreting correctly the present global situation, (though he admits the importance of it,) as in finding some hints in the present social sciences that would be conducive to the reconstruction of the Transnational Sociology he has been exploring for the past ten years. Therefore, this article has adopted the form of an overview of the books arbitrarily chosen by the author.

All of the following seven books selected (to which the author has referred in this article,) were published in Japan in the 21st Century. (It is true some of the original editions

had been published before September 11th.)

- [Book 1] Ulrich Beck, 1997. *Was ist Globalisierung?* Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (Japanese Edition, translated by T. Kimae et al. 2005. *Gurohbaru-ka no shakaigaku*. Tokyo: Kokubunsha.)
- [Book 2] Martin Albrow, 1999. *Sociology: The Basics*. London: Routledge. (Japanese Edition, translated by Y. Sato et al. 2001. *Gurohbaru Jidai no Shakaigaku*. Tokyo: Nihon Keizai Hyoronsha.)
- [Book 3][Book 4] Robin Cohen and Paul Kennedy, 2000. *Global Sociology*. Great Britain: Palgrave Publishers. (Japanese Edition, translated by Y. Yamanouchi and S. Ito, 2003. *Gurohbaru Soshiorojii*. Tokyo: Heibonsha.)
- [Book 5] Guen Kikkawa (ed.) 2003. *Kokusai Kankeiron wo Koyete: Toransu Nashonaru Kankeiron no Shinjiguen*. Tokyo: Yamakawa Shuppansha. (*Beyond International Relations: New Perspectives of Trans-national Relations*)
- [Book 6] Takamichi Kajita (ed.), 2005. *Shin Kokusai Shakaigaku*. Nagoya: Nagoya Daigaku Shuppankai. (*New Trans-national/Global Sociology*)
- [Book 7] Akira Iriye 2002. *Global Community: The Role of International Organizations in the Making of the Contemporary World*. Berkeley, California: the University of California Press. (Japanese Edition, translated by Hatsuye Shinohara, 2006. *Gurohbaru Komyunitii: Kokusai Kikan/NGO ga Tsukuru Shakai*. Tokyo: Heibonsha.)

Viewed in total, the author has found in these books many fascinating revelations of the changing world scenes with some efforts in constructing theoretical frameworks in certain fields of study as well as in refining terminology concerning globalization and its accompanying concepts. He, therefore, admits these are positive contributions both to International Relations and to Sociology. As he was reading these works of the present day social sciences, however, he felt something was lacking, something very important.

The author is now aware that most modern social scientists, even at this stage of the 21st Century, may consider themselves as analyzers of the past and the present world, the future being uncertain and unpredictable. On the other hand, the author has, as mentioned at the beginning of this article, been struggling to construct a more agreeable and more desirable world in future, offering some basic framework of Transnational Sociology. After the review of the contemporary literature, he may feel some significance in his academic

position in the Social Sciences, though he admits *his* Transnational Sociology is at a rudimentary level. Concluding this abstract, the author would like to invite other social scientists, partially for that last reason, to join in this effort of constructing the future together in a more refined way, apart sometimes from important elaborations of how to analyze the past and the present.